

イースター 希望の中を生きる



イエス・キリストを救い主と信じ、私たちは信仰の道へと導かれ、教会生活を始めました。時には困難が待ち受けていたり、挫折したり、順風満帆な日々だけではなかったでしょう。それでも私たちにはいつも希望が与えられています。このイースターに私たちは何を思うでしょうか。

イースターに思うこと

大西 順

私は1966年イースターに当時の渋谷バプテスト教会でJ・A・クラーク牧師より洗礼を受けました。7歳だったので、宗派がバプテスト派だったので、いわゆる幼児洗礼ではなく、大人の礼拝で人々の前で自身の信仰告白をして、その後礼拝堂の正面階段にあるバプテストマブルで全身を水に浸す浸礼にて洗礼を受けました。その年の正月頃から、居間にあつたついで両親が待っていて、そこで滔々とイエス・キリストが生まれて、十字架にかかり復活するまでの経緯を説明され、その生き方にならって洗礼を受けるように勧められました。そんな事が数週間続いたのち、私は日曜日の礼拝終了間際の招きの時に自らの意志で前に出て、イエス・キリストを救い主と信じ、バプテストマを受けることを人々の前で告白しました。このような両親からのアプロー

チを今、自分の子どもたちに行きかかると問われれば、「できません」と答えると思います。今から思えば、私の両親は筋金入りの強力なクリスチャンだったと思います。その当時はビリー・グラハムが来日して後楽園に数万人を集めて伝道集会を大々的に行っていた時代ですから、今では考えられないような強力な伝道が日本でも行われていた時代でした。米国からの数多くの宣教師が日本に在任し、宣教活動を行っていました。その時代に洗礼を受けたクリスチャンの先達が教師となり、また信徒となり、日本のキリスト教を今まで支えて来た訳ですが、クリスチャン人口が日本の人口の1%を切つて久しい中、これからクリスチャン人口がどんどん減つていったらどうなるのだろうかという憂いは心の中にいつもあります。それでも2千年前にガラヤ湖畔から始まった宣教が、この遠く離れた日本においてももしっかり根ざし、毎週礼拝が守られています。これに感謝しつつ、神様のご計画は必ずやあることを信じて、これからも礼拝を守っていききたいと思えます。

イースターの喜び

大橋京子

我が家のリビングルームの窓のすぐ目の先にレンギョウの木が植わっています。少し暖かくなって来たのに一向に芽吹かず、枯れてしまったのかと心配していましたら、3月の声を聞くと俄かに瑞々しい緑の芽が出て、続けて鮮やかな黄色の花が咲き始めました。神様の摂理が地上のすべてのものに及んでいることを感じずにはいられない瞬間です。枝がもう少し伸びたら切り取って花瓶に挿し、イースターエッグを吊り下げようと思っています。

昨年来、私達はこれまでに経験したこともないコロナ禍に苦しめられています。自粛生活を強いられ人に会うことも叶わず、ひたすら我慢の日々が続きますが、苦難の先には必ず希望があることを心から信じたいと思います。「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭

わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」(1コリント10・13)なんと心強い言葉でしょう。まだ先の見えないコロナ禍の日常が続くことになるのでしようが、神様が必ず道を備えて下さることを信じて心静かに過ごしたいと思います。

イースターを迎えるにあたって、私達の罪を負い贖いをして下さった主イエスの深い愛を覚え、それによつて私達にも永遠の命が与えられていることに感謝して生涯を全うしたいものです。

昨年来、弟と姉が相次いで御許に召されました。そのせいか、俄かに死というものを身近に感じるようになりました。しかしそれは決して暗いイメージではなく、主イエスの復活によつて神のみ国がより親しいものに思えるようになりました。

先に召された教会の友人や家族のために、讃美歌405番「また会う日まで」をそつと口遊んでいます。天上に届くことを願ひながら。

コロナ禍に思う

馬場 茂

深く悩むことではないが、かわいそうに思うことがある。ハンク・アーロンさんが先日亡くなった。86歳であった。その名前は野球にそれほど興味がない人でも、私たちの世代にとってはホームラン王として有名な選手である。人格的にも大変優れた人である。まあ、亡くなっても不思議はない年齢であつて、そのように語られているが、直前までびんびんしておられたことはあまり報じられていない。そして、モデルナ製ワクチンを1月5日に受けていたことである。アーロン氏は、「ワクチン懐疑者が多い黑人層に対して少しでもお役に立てるなら」との気持ちがあつたという。死因は公表されていない。

日本でも60代の女性看護師が亡くなった。「因果関係は調査しませんが」と厚生省は言うが、CDCによると、他のワクチンでも100万人

あたり10数人程度の死亡者は出るので特段の問題はないという見解らしい。しかし、どちらのケースも自然死に分類され、副作用の問題ではないとされる。えつ、死んでも副作用としてカウントされないの！北欧ではファイザー製ワクチンで高齢者が多数死亡したという。それ以後の報告はない。疑うわけではないが、mRNAって本当に安全なのか。

「私はとても誇りに思う。これはこの国(米国)の多くの人を救うことができるほんの小さなことです」と語つて接種を受けたアーロンさんの心意気を感じる。「でも、まさか私が死ぬとは思わなかった」と思つたのでは。ただ、「義のゆえに滅びる正しき者あり(伝道の書7・15)」とも言う。少し前のことだが、日本のホームラン王の王選手之母上が成城の老人ホームで108歳の長寿を全うされたことを思うと、86歳は若すぎる。

私はと言えば、5月に順番が回つてくれば接種を受けようと思う。やはり10万人に1人の死ぬ確率より、コロナに罹患する怖さが勝るから。

大いなる希望

尾藤美紗子

原稿依頼を受けた3月初旬は東日本大震災から10年が経とうという時期であり、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため緊急事態宣言延長下でもあった。テレビの特集番組を見て考えさせられたのは愛する家族や友人、また故郷や住居、仕事を失った方々は何を支えに生きていくのだろうか？ということである。残された家族との絆、在りし日の思い出や人生の生き方、あるいは託された使命か……。愛する人が行方不明のまま10年を過ごしてきた方々はどんな気持ちでいたのだろうか？ コロナウイルス感染により亡くなられた方のご遺族は臨終にも立ち会えず、葬儀で棺の中のご遺体を見ることすら許されない。「死」を実感できない心境とはどんなものだろうか？ もし自分がその立場だったらと一生懸命想像してみるが、正直なかなか想像しきれるものではない。

い。
「生きる支え」となるもの、あるいは「希望」に繋がるものが未だ見つけられず毎日を送っている人は多いと思う。

しかし私たちは「大いなる希望」を知っている。「大いなる希望」とは、主イエス・キリストが天から再び私たちの許に来られるということ。私たちはどうしても今生きているこの世の出来事に振り回され不安になり、嘆いてしまいが、天に視線を向けると、神様が死者の中から復活させてくださった主イエス・キリストがおられ、祝福に満ちた永遠の交わりは朽ちることがない。主イエスが再び天から来られる時、私たちは苦しみから完全に解放され、主と共にいることができる。これこそ真の「希望」だ。その日を待ち望み、地上で生きていこう。

「あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに對する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです」(1テサロニケ1:3)。

コロナ禍の教会生活

瀬倉昭恵

昨年2月の餅つきを最後に、教会行事はほぼなくなりました。今年の教会総会は延期になりました。世界中の人々が、新型コロナウイルスに恐怖を抱きながらの生活を余儀なくされる日々の始まりです。教会の礼拝は座席の間隔を空け、またライブ配信により、遠方で教会に来られない兄弟姉妹の方と共に、礼拝を守ることが出来るよう工夫されています。

街を歩いていて気になるのは、シャッターが降りている店舗が増えていることです。教会内では、聖歌隊の歌声が聞こえなくなり、淋しさと異様さを感じます。今まで当たり前に行われていたこと、礼拝後のお茶を飲みながらの教会員同士の交わりもなくなりました。密を避けるためです。聖餐式や献金の様式も人と人が触れない工夫が成されています。岸牧師の緊張感は肌で感じます。

イースターのことを考えます。「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」(1コリント1:18)。「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」(同1:23-25)。

コロナ禍でのイースター、これも神様から与えられた試練。全世界の人々が同じように与えられた恐怖感も、自粛生活、巣ごもり生活を体験した人類は、神様により強められていく。

ワクチンが全員に渡り、ある程度治まってもインフルエンザのようには毎年接種するのは未だ分かりませんが、今の状況が、思い出話になる日が訪れることを願っています。この時を乗り越えたいと思っています。

追悼

立花

故・
紀太温子姉

紀太温子姉は、3月4日静脈瘤破裂のため逝去されました。享年98歳でした。生涯独身だったため晩年の全てを姪御さんに任せ、そのご判断で葬儀は親族のみで行われました。

お元気なころ、教会の近所にお住まいでしたので礼拝の生花をお願いしました。「神様に献げる生花は立花です」と言われました。全ての花が天上に向かうように活けるのが立花でした。紀太さんの生涯は、まさに立花のように御国を目指した生涯でした。

戦災で焼け出され終戦。その翌年の秋、お父様が急逝され紀太さんが父親代わりとなって家族を支えました。独り大阪大病院の構内に住み、文部技官、臨床栄養管理責任者、看大非常勤講師などの勤めに追われる日々でした。その

後吹田でお母様（セキ姉）と同居。近くの城北教会で求道し1969年のクリスマスに2人そろって受洗しました。

1972年ごきょうだいの暮らす東京に転居を決意、東京大病院で働くことにしました。新居が経堂北教会の近くだったため、その年のクリスマスにお母様と一緒に転会しました。1986年お母様が天に召されるまで、ご自身の専門を生かしながらそのお世話に全力投球するとともに、「高血圧の食事三六五日」の執筆や毎日新聞に1年間連載等々、仕事にも励みました。多忙な日々を支えたのは、「主に選ばれる者は、選ばれる前から主に愛されていると私は信じています」との信仰でした。

「入院を機にあなた自身も反省し、人間の力の及ばない神様の大きな恵みの中に生かされていることに目覚めてください。この喜びを噛みしめたとき、必ずあなたはよくなりますよ。大切なのはあなたの心次第です」と患者さんに語ったことが、ご自身の信条でした。「主の御心のままに」と生き抜かれた生涯でした。（岸俊彦）

伝道者としての御生涯

故・
鈴木賛美牧師

鈴木賛美先生の訃報をお聞きしてびっくりしました。2014年頃のクリスマスカードに「乳癌になったので、甘いものを食べない健康的な食生活をしている」と書いてあって、癌になられたことを知りましたが、その後も毎年クリスマスのお忙しい時期を過ぎた頃にお葉書をくださった、ということを書いてくださったので、すっかり良くなられていたのだと思っていたからです。

昨年末にも、「主のご降誕をお祝い申し上げます。今年はいつもとより少人数でしたが、クリスマス礼拝、キャンドルサービスを捧げることができました。常に必要なものは与えられています。恵みに感謝し、神様の助けを受けて、困難を乗り越えられるよう、祈りを重ねていきたいです。死に打ち勝つキリストの力を受

け、お働きが祝されますよう、お祈りいたします。平安」
というカードを受けとりました。が、まさか癌が転移していたとは思いませんでした。

鈴木先生は経堂北教会で2004年から2007年まで伝道師として奉仕された後、和歌山県海南市にある愛隣教会に赴任され、ずっと愛隣教会で奉仕されてきました。和歌山は私の両親の出身地であり、和歌山教会や粉河教会の先生方にはお世話になってきたこともあり、母がぜひ就任式に出席したいと申し、私も一緒に6月に行われた就任式に伺いました。地味は小さな教会が多いので、牧師先生方は協力し合って伝道されているというお話を聞き、先生方が鈴木先生の就任を喜んでくださっているのを感じられました。愛隣教会というのは1884年に創立された和歌山県内で一番古いプロテスタント教会だそうです。その教会で教会員の方々に愛され、最後まで奉仕された賛美先生のことを忘れなと思います。

（志摩穂子）

説 教

『さあ行く』

イザヤ書12章1～6節
マルコによる福音書16章1節～8節

岸 俊彦

「キリストが復活なさった」。これほどビックリすることは、そうそうあるものではありません。ただビックリしたというより、キリストが復活されたことは、とても恐ろしいことでした。怖いことは忘れられないものです。

最初のイースターの時、キリストが埋葬されたお墓に急いだ女性たちは、忘れられないほど怖い体験をしました。彼女たちは、キリストが十字架に磔になった時も、墓に葬られる時も、その場に立ち会いました。キリストを本当に大切に思う一途さが、彼女たちを墓へと駆り立てたのでしょうか。

墓穴は動物たちが中に入らないように大きな石で塞がれています。ところが彼女たちが墓に着いてみると、石は既にわきへ転がしてありました。彼女たちは何か胸騒ぎがして、すぐに墓の中に入りました。「墓の中に入ると、白い

長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた」(16・5)のでした。この「ひどく驚いた」という言葉は、死ぬほどの目に遭った時、聖書では使われる言葉です。彼女たちは天使と出会うと喜んだのでありません。死ぬほど恐ろしかったのです。

天使は語りました。「驚くことではない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である」(16・6)。彼女たちは、この天使の言葉通り、愛するキリストの遺体があるには無かったことにすぐ気づきました。墓は空っぽだったのです。彼女たちは墓を出て逃げ去りました。震え上がり、正気を失いました。死ぬほど怖い目に彼女たちは遭いました。

「彼女たちは外に出るやいなや逃げ出してしまった。ぶるぶる震えて、正気を失ってしまったから。誰にも何も言わなかった。恐ろしかった。なぜなんだ」(16・8意訳)。これがマルコの本来の終わりです。9節以下は後から付加されました。

なぜ怖かったのでしょうか。

彼女たちは、キリストが復活されたことを信じていなかったからです。もつと恐ろしいことがあります。それは自分が本当に不信仰で罪人だと認めることです。どこかで自分が間違ったことをした。それが私たちの心の片隅で疼くということがあります。その原因が本当に明らかになったら、生きていけない、ということさえあります。私たちが本当に自らの過ちを認め、その相手に本当に心から謝ることは難しいのです。自分の過ちをただされることを私たちは恐れます。

彼女たちにキリストの言葉が伝えられました。「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる」(16・7)。

ガリラヤとは、弟子たちの故郷であり、キリストが活動を始めた場所です。信じることでできない弟子たちに、キリストが「一からやり直そう」と語ってくださいました。それが復活のキリストの約束です。彼女たちが、キリストのその言葉を信じたかどうかは、この箇所には伝えられていません。

私たちならどうするでしょう。

はつきりしていることがあります。それは、言葉が出なくなるほど恐ろしくなった彼女たちが、やがて弟子たちにキリストの言葉を伝え、彼らと共にガリラヤに向かったことです。マルコは伝えていませんが、他の福音書がそのことを伝えてくれます。キリストの約束の言葉こそが私たちの恐れ、不信仰、そして罪を打ち破ります。「なぜなんだ、キリストが復活されたのは」。私たちの罪を砕き、許すためです。私たちを救うためです。新しい命を与えるためです。

コロナ禍の困難な世の中を、「さあ行く」とキリストが励ましてくださいます。共に「さあ行く」と声をかけあって、志を新たに新年度を出発しましょう。

伝道師の書き込み

このコーナーの題名である「書き込み」とは、本に入れる「書き込み」からつけたものです。インターネットの掲示板やSNSへの「書き込み」とかける心づもりもありましたが、あくまでも本に入れる「書き込み」を目指して書いていきたいと願ったネーミングです。しかし振り返っても、本来の意図であった「私たちの現実」という本に対する、信仰の目から見

た「書き込み」としては不十分なものではあるのですが。

以前も書きましたが、こんな題をつけておきながら、私自身はあまり本に書き込みをしません。ただ、書き込みたい言葉に出会わないわけでもありません。よく覚えているのは哲学者キルケゴールの『死に至る病』の一節です。学生時代、哲学の課題のために読んだ本です。肝心の本の内容については、正直に申しまして難解過ぎて理解できませんでした。しかし序文の一節に心くすぐられるものが

ありました。この本には「死に至る病とは絶望である」という有名な命題がありますが、序文にヨハネによる福音書11・25にある「死に至る病」を巡って次のような言葉が出てきます。「復活にして生命」であるキリストが墓のもとに歩み寄るといふことだけでもうこの病が死に至らないことを意味してはいないであろうか？（中略）彼がそこにあるからして、その故にこの病は死に至らないのである」。墓に歩み寄るキリストの姿が既に死を、また絶望を克服さ

せている。当時読んで、なるほどと思わされたのを覚えています。今月号の巻頭の説教はもともと墓前礼拝で行うつもりだったものため、残念ながら今年も密を避けるため、墓前礼拝は中止と決定しました。経堂北教会では1度しか行くことができていませんが、教会墓所に行く度に先の一節を思い起こします。その度ごと、この墓に「復活にして命」である方が歩み寄ってくださっている、その足音を聞く思いになります。

（狩野進之佑）

牧師の書斎から



この冬は大雪となるかもしれないと思つて、昨年末に除雪シャベルを購入しました。例年だと、車はスタッドレスのタイヤに付け替えます。雪の中、餅つきの道具を取りに行く場合のためです。ところがコロナで今年は餅つきは早々に中止になりました。雪が降つたら出掛けなければよいので、タイヤは付け替えませんでした。予報通りなのか外れたのかは分

かりませんが、雪は降りませんでした。3月は暖冬でした。教会の庭の梅の木は遅咲きです。何年か前までは3月にならないと咲きませんでした。ところが温暖化のためなのか、一昨年も昨年も今年も2月に咲いて、3月になると花はすっかり散ってしまいます。天候のせいかな、鳥や虫たちのせいか、ここ2年は受粉が上手くいかず、実が全くといっていいほどなりません。おかげでこの2年、教会学校の梅の実摘みができませんでした。教会の地下の物

置には、何年か前の豊作の時に作った梅酒がそのままになっていました。あとは空の容器が2つ置かれました。

ところが今年はなぜか、小さな小さな緑色の梅の実がたくさん枝についています。2年ぶりのことです。毎日数えるように楽しみに見えています。6月になったら2年振りの梅の実摘みです。梅ジュース作りもできます。

一度梅干しを作ってみたと思うのですが、まだチャレンジしたことはありません。以前教会員の

方が教会の梅で梅干しを作ってくれました。フルーティーで塩梅もちょうどよく、実に美味しい梅干しでした。かびたり腐ったりしないように、またしよっぱすぎないように塩加減が難しいようです。コロナ禍で人間の活動が停滞したおかげで、昨春の緑は例年になく鮮やかで、空気も澄んでいたと言われました。もしかしたら梅の実も関係があるのかもしれない。コロナ禍、教会にとってなくてはならないものは何か、考えさせられる1年でした。（岸 俊彦）

個人消息



長老のファイル



コロナ禍2回目の春です。私の使命である教会餅つき大会（と勝手に信じてやってみてまいりました）も、もちろん中止でした。自分でも驚くほどに実は落ち込みました。思い通りにならないことの多いコロナ禍ですが、1年を振り返る今、「本当によく礼拝を守った！」という充実感の中におります。それはCSの活動においても同様です。極端に言うと、教会はこの1

年、礼拝しか行っていないのです。礼拝さえ守ることができればよいのです。この礼拝における充実感とは自然なことと言えます。

礼拝堂に集うことができる喜び、ライブ配信にあずかれる喜び、それぞれの場で同じ十字架のもとに、それぞれのために祈り合う喜びも知りました。

長老会で、当教会のこの1年の献金額は、例年と変わりがなかったとの会計報告を受けて驚きました。金額が重要ではないのですが、礼拝堂に集って顔を合わせるこ

ができている方々だけではない、多くの兄弟姉妹の存在と思いを強く感じて頭の下がる思いです。

まだまだコロナ禍は続くのでしよう。どんなに人と人が触れ合えなくても、信頼し合い、祈り合うことが必要です。

CSの子どもたちにも引き続き我慢と緊張を強いてしまうのは、校長として心が痛みます。しかしどんなにマスクで表情が見えなくても、触れ合うことができなくても、お互いを主の子どもとして信頼し合えることを伝えるチャンス

です。

大人同士も同じです。会話で互いを理解し合う機会がほぼありません。主にある兄弟姉妹として、言葉がなくとも信じ合うことが必要です。私は特に気を抜くと鋭い目つきだけがマスクから覗いてるということになりかねませんので（目つきとは裏腹にいつものほほんとしています）、言葉や雰囲気

に注意していきたいです。そして祈り合いつつ、信頼、信仰を深め合っていきたいと思っています。（石室裕二）

掲示板



- 定期教会総会
4月25日(日) 礼拝後～午後1:00

編集後記



- ▽いよいよ新年度のスタートです。気をつけつつ、今年度も豊かに礼拝を守れますように。(沢田)

「栄 光」2021年4月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp